

第2次大戦の日本の行動（その7） 戦略的意図を誤った敗戦期の作戦

01602334 松山大学 湊 晋平 Minato Shimpei

まえがき

日本は敗戦期（1944.7~1945.8）に戦略的意図を誤った作戦を行って徹底的な敗北にいたった。この時期の日本の戦略構想は、一撃和平論に凝り固まっていた。返勢のなかで優勢な敵に一矢を報い、これによってより有利な条件で和平を求めようとしていた。

しかし、本来戦力的に劣る我方が、優勢の基に時間・場所を選んで攻撃してくる敵に、有効な打撃を与えるのは困難であり、逆に常に敵によって壊滅的に撃破された。

敗戦期の日本は勝ちを求める作戦を選ばずに、敵に犠牲を強いる作戦を選ぶべきであった。勝利を目標とせず、持久態勢で敵に出血を強いる、しかし、味方にも犠牲の多い戦闘は高く評価されている（ペリリュー島、ルソン島、沖縄）。そして、政略的には、こうした持久の間に、味方の犠牲をより少なくするために、迅速に和平を求める行動を採るべきであった。

太平洋方面（マリアナ海戦、サイパン玉砕、ペリリュー島の善戦）

マリアナ海戦は日本海軍が多年画いていた邀撃作戦が、我不利の状況で実施を強いられたものであった。水上艦艇は比較的損害をまぬかれたが、戦力の中心である海軍の航空部隊（空母航空機、基地航空部隊）は壊滅的打撃を受けた。これは彼我の戦力見積もりを誤り、劣勢かつ技術的に未熟な、わが航空部隊に、完勝を求める無理なアウトレンジ戦法を採らせたためである。〔1〕

サイパン玉砕に象徴されるマリアナ諸島の陸上戦闘で、陸軍の作戦部は、ソロモン諸島、ニューギニア、マーシャル諸島の陸上戦闘の苦い経験について学習努力がなく、圧倒的な彼我の戦力格差のもとで惨敗した。〔2〕

これに対しペリリュー島の戦闘では、彼我の大きな戦力格差を陣地構築によってカバーする作戦が功を奏して遙か優勢な敵に対し善戦し、敵の出血を強いた。〔3〕

比島方面（比島沖海戦、レイテ・ルソン島の戦闘）

比島沖海戦ではマリアナ海戦で残存した水上艦艇を殆

ど消耗した。そしてその損害の割に、敵に与えた損害は小規模であった。我方には全滅覚悟の「砲」部隊もあり、充分その任務を果たしているが、レイテに上陸した米軍を攻撃して撃滅し、比島を確保する戦略目的は失敗した。個々の部隊は犠牲となりながらその役割を果たしたが、指揮連絡システムがよく機能せず、犠牲の成果が得られなかった。〔4〕

陸軍はレイテ島の戦闘で決戦を意図した。極力現地に部隊を集中し、またこの善戦健闘もあったが、制空権・制海権が敵手にあり、補給力の差が大きく敗退した。海軍が比島沖の海戦に破れ、敗退した時点で、戦略的にレイテの戦闘では持久戦を選択し、ルソン島の戦力整備を図る方策を採るべきであった。〔5〕

レイテ島に比島方面軍の地上兵力の半分を投入し、航空機の8割を消耗・多量の軍需品を失ったためルソン島では、戦略持久の作戦に徹底した。日本軍は補給の途絶したなかよく敢闘し、はるかに戦力・物量の勝る米軍20万人を6カ月にわたってルソン島に釘付けした。この成果を米軍戦史も評価している。日本軍の損害の多くは餓死と病気で、戦死は1割強であった。〔6〕

比島方面の作戦を振り返るとき、日本軍はなんとか一矢を報いようと敢闘したが奏功しなかった。マリアナ方面の決戦で敗れた後は、いかに早く・うまく負けるかの戦略を選ぶべきであった。時間の経過とともに彼我の戦力格差はますます増大し、勝利の可能性は減少し、損害のみ増加するのであるから早期に終戦を図る必要がある。この点政治指導者の資質が問われる。戦術的にも持久戦法を選び敵に出血を強いるのが望ましい。

沖縄方面

圧倒的な物量のもとで、制海権、制空権を確保して上陸し、攻撃してきた米軍に対し、海上、陸上そして沖縄住民を巻き込んで死力を尽くした戦闘が86日間におよび、日本は破れたが、米軍の戦略思考および行動に影響を残した。日本の敗因は、日本の国力・戦力が枯渇しようとするときであり、逆に米国は極めて充実したときに、

最後の決戦として死力を尽くすか（海軍の主張）、本土決戦のために戦略持久するか（陸軍の主張）の意見の対立にある。さらに陸軍のなかで、航空優先で戦われるか、地上優先で戦われるかの基本的問題をめぐって、本部の統帥が大局的立場からの戦争指導を図らずに、沖縄戦を戦う地上部隊に細部にわたって干渉してきたことにあった。沖縄の犠牲を生かすためには、地上の善戦が続けられた5月から6月にかけての独降伏直後、大局的・早急に、直接米国との停戦交渉が進められるべきであった。敗戦期の戦略基本であった一撃平和論は、沖縄の善戦期間中に生かされるべきであった。〔7〕

まとめ

日本が第2次大戦に敗北するに至った原因は、経済力、生産能力、軍事力の大きな格差の問題として強く認識されている。しかし本研究ではそれ以上に軍事的エリート（以下エリート）のソフトウェアの欠如に、注目のウエイトを置く必要性を指摘したい。特に敗戦期にはエリートの硬直した思考が、無為の犠牲を大きくした。

1. 日本は敗戦期に、勝利の見通しが乏しいにもかかわらず、勝利を狙う戦略的に誤った作戦を計画・実施し、逆に壊滅的な損害をこうむる結果となった。
2. エリートが厳しい現実を冷静に直視し、新しい概念の創造とその運用を行うことが出来なかった。実際には現場の創意工夫が成果をあげた。

3. エリートは戦勢が不利になるに従い、現実に対応する具体的方法や対策よりも、抽象的な空文虚字の作文に逃避していった。
4. 緒戦に奇襲により勝利を得た概念の枠組みに囚われ、新しい状況への判断能力や対応学習能力を欠いていた。
5. 敵に比べて極めて乏しい戦力資源の、陸海軍への適切な配分がなかったごとく、官僚的縄張り争いが激しく、作戦面でも大局的な目的達成への協力が図られなかった。

参考文献

- 〔1〕 高木惣吉,「太平洋海戦史(改訂版)」,岩波新書, pp107~114, (1959)
- 〔2〕 伊藤正徳,「帝国陸軍の最後 死闘篇」, pp29~82, 文芸春秋新社, (1960)
- 〔3〕 伊藤正徳,「帝国陸軍の最後 死闘篇」, pp83~91, 文芸春秋新社, (1960)
- 〔4〕 高木惣吉,「太平洋海戦史(改訂版)」,岩波新書, pp118~127, (1959), 戸部良一他,「失敗の本質」, pp178~221, 中公文庫, (1991)
- 〔5〕 林 三郎,「太平洋戦争陸戦概史」,岩波新書, pp197~206(1951)
- 〔6〕 伊藤正徳,「帝国陸軍の最後 特攻篇」, pp11~54, 文芸春秋新社, (1961)
- 〔7〕 林 三郎,「太平洋戦争陸戦概史」,岩波新書, pp226~232(1951), 戸部良一他,「失敗の本質」, pp222~261, 中公文庫, (1991)

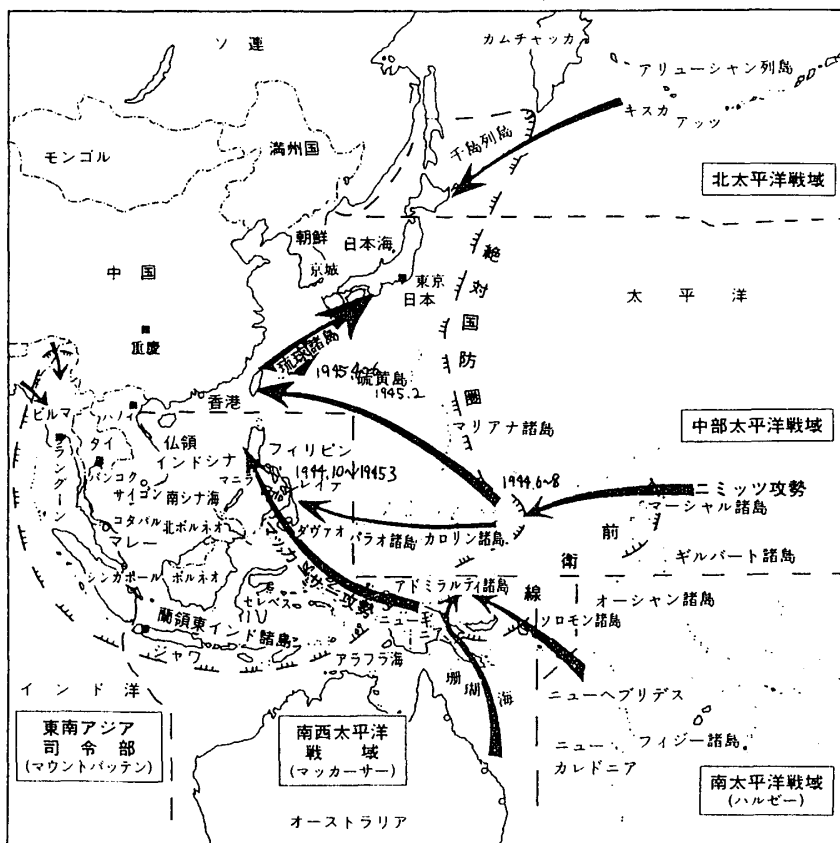


図 米軍の進攻作戦 森松俊夫,「図説陸軍史」p147